

《書評》

『「読む」からはじめる日本語会話ワークブック』

吉川達\*・森勇樹\*\*・二口和紀子\*\*\*・佐藤淳子\*\*\*\*・佐々木良造\*\*\*\*\*・  
門倉正美\*\*\*\*\*著、アルク、2024年

小河原 義 朗†

本書は、話すための日本語学習教材である。万国共通のテーマについていくつかのストーリーを読むことで、そのテーマについて考えたり話したくなり、そしてみんなでそれについて話したり議論したりするための多様なタスクが用意されているのが特徴である。

本書は全10課から成っており、各課は次のような3段階の構成になっている。

まず、Step 0の「話してみよう」で、読む前のプレタスクをすることで各課のテーマについて日本語で考える準備をする。次に、Step 1で各テーマについて異なる視点から書かれた3つのショートストーリーを読む。このストーリーが、自分の体験を思い出したり、自分だったらどうするかを考えたりするなど、テーマについて考える材料となっている。そして最後にStep 2で、グループやペアで次の4つのタスクに取り組む。

タスク①は「内容を確認しよう」で、読んだ内容を簡単に確認する。タスク②は「自分語りをしよう」で、各テーマを自分ごととして捉えるために自分の経験や考えを振り返って話す。タスク③は「もっと深く話そう」で、各テーマについて客観的に、より深く考えて言語化する。タスク④は「まとめよう」で、話し合ったことをもとにして自分の考えを整理し、短い言葉で表現する。これに加えて「+ aのタスク」として、各課のテーマについてインターネットで情報を収集したり、他者にインタビューしたりするなど、さらに掘り下げるタスクが用意され、各課が終わる構成になっている。

授業で使用する場合は1課90分が想定されているが、学習者の日本語レベルや授業回数、授業時間に合わせて必要な部分を選んで使うなど、柔軟にアレンジすることが可能となっている。各テーマは、後半に進むにつれて抽象度が高くなるように配列されているが、学習者の興味や関心によって自由に選択でき、モジュール型教材としても使用できる。各課の具体的なポイントや著者が

---

\* 立命館大学情報理工学部准教授

\*\* 在日米国大使館日本語研修プログラム主任教官

\*\*\* 開智国際大学別科日本語研修課程講師

\*\*\*\* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院助教

\*\*\*\*\* 静岡大学国際連携推進機構特任准教授

\*\*\*\*\* 横浜国立大学名誉教授

† 東北大学大学院文学研究科教授

ogawara@tohoku.ac.jp

らのアドバイスが、本冊とは別に本書のウェブサイトからダウンロード可能であり、教師が授業で使用する場合には指導時の参考になる。

本書に掲載されているストーリーは、日本語能力試験 N3 レベルの日本語を用いて著者らによってオリジナルで書かれており、初級修了レベルから上級まで使うことができる。これらのストーリーは、著者らが中心として運営している多読情報サイト「たどくのひろば」で公開されており、関連情報や他の素材を利用することができる。タスクレベルの対象は、語学能力の国際指標である CEFR の B1 レベルが想定されており、B2 レベルの運用が目指されている。

本書は読解教材ではなく、話す練習をするための教材であり、各課のストーリーは、それぞれのテーマについて学習者が自分なりの意見や考えを生み出し活性化させる契機としての役割を持つ。そのため、本書にはとても魅力的なストーリーが集められており、ストーリーの視点、トピック、事例などに偏りがなく、多様性があるので、読者にとっても興味深く、飽きさせないだろう。一つひとつのストーリーも社会的に話題となった問題を事例とともに取り上げたり、日常生活に潜む無意識や無知を、見方を変えることによって浮き彫りにし批判的に問うたりするなど、深く考えさせるもので、知らず知らずに引き込まれ、思わずじっくりと読んでしまう内容になっている。このようなストーリーを契機に話し合うことで、自分の曖昧だった考えが整理されたり、意識していなかった規範や基準、思い込んでいたステレオタイプや暗黙の了解、偏見が浮かび上がって可視化されたりして、異文化との違いやその背景に想いを馳せる機会にもなる。

しかし、テーマについて自分ごととして捉え、客観的に、より深く考えて話すためには、単なるおしゃべりでは難しく、相互に共通する土台に立った意見の交換が必要である。日本語学習者は背景が多様なだけでなく、素材の理解度も異なる。ある学習者は素材内容からではなく、単にトピックから日頃の個人的な思いや感情で話すだけになってしまうかもしれない。またある学習者はストーリーにある一部の事例だけを理解し、個人的な経験に固執して話すかもしれない。このように素材内容から離れたら、思い込みや誤解をしたりしたまま意見交換をしてしまうと、読み手に共通する確かな理解がないまま行うことになる。その結果、何を言っているのか、焦点が合わずに終わったり、素材内容とずれた議論になったり、共通する理解や焦点を確認することに終始してしまうこともある。素材は、読むことで話すための契機になればいいとはいえ、相互に共通する土台がないままに行う意見交換が、時に拠り所のない感情をぶつけ合うだけの水掛け論になるのは、会話やディスカッションの授業実践でよく見かける光景である。

例えば、素材内容が日常生活に潜む無知を、見方を変えることによって浮き彫りにし批判的に問うものであった場合、「自分は何も考えていなかった」という気づきを得るためには、その気づきに至るテキスト情報の理解が前提となる。この気づきに至る共通の理解が、読み手である学習者の多様な背景や経験による考えや主張の土台としてあるからこそ、「確かにそうかもしれないけど私はそうは思わない。なぜなら～」という根拠のある意見交換が可能になる。確かな理解に基づく明確な意見が交わされるからこそ、本質に迫る議論になり、「自分は無知に気づかないまま思い込んでいたのかもしれない」と相互に自己認識が炙り出され、自己変容や新たな発見、次なる問いを生み出す源になる。

本書の各課には、テーマを同じくする3つの異なるストーリーが配置されている。そのテーマを核として各内容が各学習者に理解され、学習者間で共有されることによって、より確かな理解が得られる。その上で、他者と異なる視点や意見が交わされることによって一つのテーマについての理

解や考えがより深まっていく。3つのストーリーは、テーマは共通しているがそれぞれ異なる視点や主張を持っているからこそ、自分の考えを確かな理解と根拠に基づいて他者に説明する必要性が生じる。そして、視点や主張が異なることで議論になり、議論を通じて相手の考えを理解することによって、また自分の理解が深まるだけでなく、自分の考えを広げ、他者との協働や新たな気づきにつながる。そのために各課の3つのストーリーをどのようにつなげ、どのような話し合いに導くのが、授業実践において非常に重要なポイントであり、教師の腕の見せ所になる。

もちろんその方法は一つではない。まずは本書の魅力的なストーリーとタスクをもとに実際にやってみること、そして何が起きているのかを振り返り分析することが重要である。そのようにして国内外の多くの教師によって本書が用いられ、多くの多様な実践が行われ、かつその実践が共有されることで、話す学習を活性化するために教師は何をすべきかが検討され、それぞれの現場で生き生きとした、話すための学習が行われることを期待したい。

これからの日本社会では、日本語を母語としない人々が増え、彼らとコミュニケーションをとる場面が確実に増えていく。本書にあるようなストーリーを契機にして、学習者が多様で豊かな発想に基づいた考えを共有しながら自由に話し合うことを積み重ね、相手が日本語を母語とするしなにかかわらず、自信を持って楽しく積極的にコミュニケーションに臨むことができる、そしてそれを契機に、初対面であっても新たな人間関係を構築する機会が増えていくことも期待できる。

本書が、学習者対象の日本語クラスだけでなく、日本語を母語とする大学生と留学生が共に学ぶ多文化共修クラスや、地域の交流の場などで広く利用され、楽しく活発なやりとりが行われることを期待する。